

突飛な話

岡野 九

北斗七星をはじめ夜空にまたたく各星座群も、洋の東西を問わず昔の人はその金色に光る点を、空想の線で繋ぎつつ色々の優美な姿でこれをとらえ、おのおの適切な名前を付してこれを觀賞した。

私は地名や由緒ある古社寺及び種々の伝承並びに史料の断片など、一見何の脈絡もなさげなものを夜半とっておいて、結び合せたりほぐしたりしつつ、その輪郭を追って郷土の埋れた歴史？の一コマが騒気楼のように浮びあがってくるのを凝視して時を過す事がままある。

これから述べる話も、古来郷土史で上下されたこともなく、また文献にも物的にも何の傍証も得られないものなのである。

だから皆様も推理小説ではあるまいしと失笑され、地方史誌の埋め草にもならぬと御這るかとも思うが、ここは蛮勇を振って披露さ

せて戴く。

下題「舞鶴地方にも大和朝廷の直轄領があった」。

まず、馬鹿話にもやはり起承転結があるのでボツボツゆこう。

日本書紀の安閑紀二年五月（西五三五年）の条に、

諸国に多くの屯倉を設置された、と在り。その中に丹波国蘇斯岐屯倉がみえるのであるが、御存知の通り当時の丹波国とは後の丹波、丹後、但馬一円を称した大丹波であり、この屯倉の比定地に関しても、従来確定的な所はないようである。

さて、これについて、説を諸書に探るに、おおもむつぎの通りである。

一、日本書紀注釈 飯田武郷著
日本書紀集解に丹波郡周枳に擬すと云ふ。信じがたし云々。

二、日本地名辞典 吉田東吾著

(1) 三宅

今の亀岡町の大字となる。篠村と、亀岡市街の間に在り。
延喜式、三宅神社は今の稻荷神社と云ふもの是也と。

按ずるに安閑紀の丹波国蘇斯岐屯倉を置かれし事見ゆ。蘇斯岐後聞ゆる所なし。即ち此処にあらずや。又この三宅は旧桑田郡の所属にて国府の位置なりと想はる。

(2) 周枳郷 (中郡)

和名抄、丹波郡周枳郷、今周枳村存す、大野郷の北に接す、河辺村もこれに属す。国郡沿革考に周枳郷は安閑紀に見ゆる蘇斯岐の地なるべしと云へり。疑ふべし、周枳は往代大嘗会の卜定に当り、主基の里に非ずや。

三、岩波書店刊「日本書紀」も前二者の説を紹介したに留まり、未詳とある。

まあ前置きはこれぐらいにして、当地のかねての心当りを探索しよう。
御承知の通り、舞鶴市西部地区には古代田造郷が置かれたと云い、後田辺郷と称され、その中枢地域に八田村が在った。
田造郷は田辺郷の誤記ではないかとの説も

あるが、ここでは一応通説に従う。

右に關し私は論を進めるに当り、紙数の都合もあり短刀直入のきらいはあるが、この一連の名称は、つぎのように解するのが妥当じやないかと愚考する。

田造郷	田辺	八田
田造郷	田部	屯田

即ち、この屯倉が約百年程経て大宝令で解体し新たに条里制を布くに当って、かつて壱田の進んでいたあたり五十戸を統べて田造郷を設け、またその後屯倉の使丁（田ノ部「農奴」）が永住したこの地を田辺と唱えるようになり、その中心部の美田（海辺の湿地）地帯を「ヤタ邑」と銘じた。「ヤタ」とは、ドブ田との意があり、古代木鋤等で耕作した時代は良田であった由。

話が前後したが、つぎに蘇斯岐屯倉の名称が後世どのような経過をたどって転訛したかという点について少しく考えてみよう。

古代は「コトバ」があつて文字がなかったが、奈良朝あたりから音訓混合で「ヤマトコトバ」を適当な漢字に当嵌めて文章を綴るようになった。古事記がそれであり、日本書紀は漢文体であるが、やはり神名、地名や意義

不詳の言葉は借字した。

尚、古代の言葉は一音一音に意味をもつていた。だから神名、地名、動物そのほかあらゆるものが漢字に意義があるのや只単に借字のものもあつた。

例えば、神功皇后の名も「記」は息長帯比売命と記し、「紀」は氣長足姫尊と書す。オキナガは地名（氏）、タラシはシラシと同様領知の古語らしい。

そこでこの蘇斯岐についても二通りの解釈がなりたつのではないかと思う。

地名辞典によれば、「ソ」は磯又は暗礁、「スキ」は砂礫地で、すなわち浜荒き青松白砂の屯倉となり、今一つの方は「ソ」は荒磯、「斯」は斯道等の「斯」で、「岐」は二支とし、両支に分れた海辺に在る屯倉と解される。もう説明するまでもない。どちらにつくにしても亀岡市や中郡の大宮町などに設置された屯倉とは考えられない。

それから蘇斯岐なる漢字も、時代が下るにつれて音標文字であるが、漢字に字義があるろうが、原義にかかわりなく、好字または略字化していったとするが普通であろう。

まあ手取早く言えば蘇斯岐——素斯木から素は自と訓じ斯木は杉と変移した。

いささか我田引水のきらいもあるが、まずはこゝらで本命の白杉に落着する。

この白杉とは往古は田造郷管であつたと云われる西舞鶴湾西岸の最北端に位する字白杉のことである。

ちなみに此処の鎮守はやはり白杉神社と唱え祭神は勾大兄とある。

中世は勾大兄は金剛童子の本地垂跡と称せられ蔵王権現と云われた由である。

勾大兄又の御名は、廣国押武金日之尊と申し皇系第二十七代安閑天皇である。

何の事はない、やはり在るべき所にデンと鎮座御したのである。

ここで又誤論旨の飛躍かとお叱りもあるうが結論を急ぎ大胆に推論すれば、さきにも一寸触れた通り、田造郷は蘇斯岐屯倉の延長線上にあり、且つ白杉はその屯倉の枢要地で屯倉解体後もなお人口に膾炙して、その遺称を存し、屯倉創始者の安閑天皇を奉斎したとみる。

現に小字名にも山門、金所や「小シリ」「ヂチキ」とか、まだ他にも由緒有り気な地名が散在する。

金ヶ崎も金日ノ崎の縮称か、或は後にのべる鉄製鍊所の岬との義か。

更に特筆すべきは、舞鶴湾外に冠嶋と並んで浮ぶ香嶋には往古には目ノ子社が鎮座あり、祭神は目ノ子郎女命と申上る。

いまは老人嶋神社に合祠されている。この目ノ子郎女命とは第二十六代継体天皇の皇妃で、わが勾大兄の御母神であつて、その出身は尾張連の妹と古事記には載せている。このように程近きところに御母子の齋宮がおわすのは果して只の偶然であろうか。

ちなみに吉原や伊根等の漁民には、老人嶋神社は女神さんであると信ぜられているようだ。この神社の主神火明命も尾張氏の始祖とあるが、この神様より後合祠の女神さんの方が有名なのはどうしたことか。

つぎに、白杉の対岸を望見しよう。いまは字北吸に鎮座の式内三宅神社は、もとは字河辺中に御座したと伝える。

これに関し丹後風土記残欠加佐郡編でも、河辺里三宅社と記す。但し同記の郷名一覧は志楽、高橋、三宅、大内、田造、凡海、志託、有道、川守と加佐郡を東より順に拾つておるのであるが、只三宅郷だけが不揃いで、古来疑問視されているし、和名抄では同郷はみえない。それではこの式内三宅神社は宙に浮くのだ。

ではそれは一まずおいて字千歳に目を転じよう。古名は波佐久美村と称した。

日本書紀に、天武天皇五年（西六七七年）九月大嘗会は斎忌は尾張国山田郡、主基は丹波国河沙郡に卜定したとあり、この聖地が当村であつたと伝える。この式定地は当時においては候補資格極めて嚴重な神聖地であり、史上加佐郡の初見と云われる時代に、この僻遠の且農耕に不適な所が大和朝に聖地第一として挙げられたことは何か余程深い縁由があつたとせざるを得ない。

「ハサクミ」村の語意は狭間の共同開墾地とのことで、主基田を共同墾地奉作した名残りであろうか。片や他の卜定地、尾張国はもと大和国葛城地方の高尾張に盤居した豪族尾張氏の主流が遷り、東海海部として威を振るつた地である。また丹後もその別派が徒遷し来り丹波国造、但馬国造、海部直として海陸に勢威を振るつた地方である。その事は丹後国一ノ宮たる宮津の式内大社籠神社の祭神は同族の鼻祖火明命で、官司も古代より連綿として海部氏が継承していることでも窺われる。

なお、大丹波国の国府の館の最初は熊野郡久美浜町字海士との地と伝えられ、その地には

式内矢田神社が在り、神服連、海部直、丹波国造、但馬国造の祖尾張氏六世建田背命を祀る。当舞鶴市字上安の式内高田神社も同神を奉斎する。

これは真偽のほどはさだかでないが、前記風土記では億弘二王が当地に避難の節は、尾張氏某が厚く庇護した旨記している。

丹後海辺の活躍推して知るべしである。ついでながら、尾張国にも丹羽郡、海部郡がある。

ここにあれこれ想いをめぐらすと、天武帝時悠基、主基の式定に当つても、当屯倉の設置に関しても共に裏に尾張氏一族の影が濃いうように感ぜられる。

この屯倉は波佐久美村よりさらに南下して河辺谷あたりまで領域としておつたやに想察される。そうして屯倉の守護神たる三宅神社を奉祀して、そのあたりを神聖地して神の辺と称していたのではなからうか。

河ノ辺は神戸里の転記との説もあつたが、此処が神戸里では色々の点から無理ではないか。和名抄も河守郷の次に神戸を載せ、旧河守上村の辺を指向している。

この大屯倉も、さきに触れた通り律令制施行により、一郷を五十戸に限つたため、田造

郷や凡海郷に分れ、なお端数になつた周辺部は隣接の郷に包括され雲散霧消したのである。追つてこの屯倉に関し、ある屯倉研究の方より左の通りまことに示唆に富んだ御教示を戴いた。

安閑紀の屯倉は大部分は米作地帯ではなく砂鉄の産地の所に置かれた。

それは父継体天皇の御代、朝鮮半島の経営に失敗し、鉄資源補給の道を絶たれた為止むを得ず国内の粗鉄産地を求めて屯倉を設置した為である。田部も農耕使丁だけではなく、製鉄工人も含んだ。

丹生の字が丹を産する鉄脈を意味するは言うまでもないが、ミオが二ツになり、ミオツ姫に丹生の字があてられるのは水銀朱を意味していた丹が日本では砂鉄を意味するようになった事による。丹は通称ベンガラと鉄丹といわれる。これが色をおびた酸化鉄である。朱は硫化水銀である。古代人はこれを混同した。即ち、赤色にちかい山砂鉄（サイ）を丹と呼んだ。山砂鉄の純良のものを真砂、一般のものを赤目とよんだ。

地名としては、ニオ、丹生、サヒ、五十里、井光、女布、杉、赤野、矢原、井原等。

そうして製錬法は「タ、ラ」製鉄法で、おびたらしい杉、又は松、積材を必要とするので赤目が出る、又は海送に使な所で、近くの燃料の最も大量にある地に製鉄所があつたのである、云々。

この説は、小島信一氏著「天皇系図」とほぼ同様である。

私は実は、蘇斯岐屯倉は農耕組と漁撈の貢を兼ねた屯倉と想定していたが、これでいくと全く趣が違ふ。

当地方にも女布、五十里（旧天台名）、ニオ、赤野、野原、大丹生、蒲入等の地名が散在し、燃料の積を名とする積山も字白杉に在るので、この説も大いに注目し値する。

金葉の山積する原でも見つかればよいがと思つていたところ、舞鶴市史各説編に、金ヶ崎には磁硫鉄磁等の鉄床がある旨記載あり。古代でも露出鉄床も手がける事があつたものかと想いをはせた次第である。

なお、西高の坂根清之先生のレポートによると、「白杉神社の附近に古墳時代後期の巨大な古墳がある。（実測御説明部略）」

この古墳は、大和朝廷の勢力がこの地方にも及んでいた事を物語るが、この白杉は土地も狭く、江戸時代の石高も僅かであるのに、

どうしてこのような大規模な古墳が営まれたのであろうか。あるいは、稲作とは別の漁撈を主とする人々と何かの関連があるのではなからうか。またその首長の墓がなぜこのような場所に乗られたのであろうか。将来の研究課題である。なお、隣接の青井にも二基の古墳があり、舞鶴湾沿岸の古代史研究の重要な手がかりであることは確かだ」とおっしゃっている。

